

福岡大学先端経済研究センター ワーキング・ペーパーシリーズ

不生産的消費概念の展開：マルサスからバタイユへ

山崎 好裕

福岡大学経済学部

WP-2018-004



福岡大学先端経済研究センター

〒814-0180 福岡県福岡市城南区七隈八丁目 19 番 1 号

不生産的消費概念の展開：マルサスからバタイユへ

要旨

トマス・マルサスは『経済学原理』のなかで、経済発展には「不生産的消費」の存在が不可欠であることを主張した。直後にジャン・バティスト・セイはフランス語の手紙を送り、マルサスを批判した。この批判を通じて、「不生産的消費」概念は翻訳されてフランスへと導入された。オスカー・ランゲは「不生産的消費」概念を元にしてマルサス理論を最適消費性向の理論と解釈した。ジョルジュ・バタイユはジャン・フランソワ・ムロン以来の奢侈肯定論の伝統のなかで「不生産的消費」を強調し、全般経済学の構想を示した。バタイユの試みは1930年代の世界不況を背景にしたものであり、ケインズ経済学と共通の起源を持っている。

JEL 分類番号：B12, B22, B29

キーワード：不生産的消費、マルサス、セイ、自然価格、最適消費性向、ランゲ、全般経済学、バタイユ、奢侈、ムロン

Development in the Concept of Unproductive Consumption:

From Malthus to Bataille

Yoshihiro Yamazaki

Abstract

Thomas Malthus insisted that “unproductive consumption” is indispensable for economic development in his *Principles of Political Economy*. Soon after that, Jean-Baptiste Say criticized Malthus sending French letters to him. Through this critique, the concept of “unproductive consumption” was translated into French and introduced to the country. Oskar Lange deciphered Malthus’s theory as the theory of optimal propensity to consume on the concept of “unproductive consumption”. Optimal propensity to consume means one which warrants the full employment level of national income. Classical economists, however, did not have the concept of unemployment. Because of this, Lange’s optimal propensity to consume must be interpreted as one which gives effective demand to correspond to natural process of products. George Bataille showed the plan of “general economics” emphasizing “unproductive consumption” in the tradition of affirmation of luxury by Jean François Melon. Both of Melon and Adam Smith were influenced by Bernard de Mandeville’s *The Fable of the Bees*. “General economics” considers human economics within huge circulation of energy in the universe. Energy is originally so excessive that people must waste them to keep the order of societies. “Unproductive consumption” has no other purpose than itself. Usefulness and productivity are nothing more than the means for “unproductive Consumption”. and Bataille’s trial started in the world depression of the 1930s and shared the origin with Keynesian economics. Bataille published his paper named ‘the notion of consumption’ in 1933. Everyone knows Keynes’s *General Theory* appeared in 1960.

JEL classifications: B12, B22, B29

Keywords: unproductive consumption, Malthus, Say, natural prices, optimal propensity to consume, Lange, general economics, Bataille, luxury, Melon

不生産的消費概念の展開：マルサスからバタイユへ

山崎 好裕

はじめに

ジョン・メイナード・ケインズが、リカードウと対比してマルサスを極めて高く評価したことはあまりに有名である。それはケインズが、マルサスの著作のなかに自らの有効需要原理に繋がるものを見出したためであった。マルサスは不生産的消費者がある程度の規模で存在することが経済発展の大前提であると考えていたが、これはそれが需要である以上、一見無駄な支出も結果として経済のためになるというケインズが大いに共感できる視点であったのである。

ケインズの死から 3 年後に、その経済学を扱った著書を出版したジョルジュ・バタイユは、まえがきにおいて「ケインズの瓶」の話を引用している。

同様にまた、本書では経済危機が、決定的な事件という意味を必然的に持っているにもかかわらず、ただ簡略に、表面的にしか描かれていない。正直言って、全体像か個々の現象かの選択に迫られていたのだ。私には、自分の思想の全体像を示すことと、木々が森全体の眺望を遮っているような、込み入った事実の相互影響のなかに埋没することを同時に果たすことはできなかった。私は、後者の選択肢、つまり、つまり経済学者たちの仕事をここでもう一度やり直すことは避けたかった。だからまた、経済危機で提起された問題についても、これを、自然界の普遍的な問題と比較してみることに留めてしまった。私は経済危機の問題を新たな光で明らかにしたかったのだが、しかし過剰生産の危機の複雑な関係を事細かに分析することを最初から断念していた。具体例を挙げて言えば、生産造化の要素と浪費の要素が帽子や椅子の製造に関わってくることを詳細に算定する作業を断念してしまったということだ。私は、「ケインズの瓶」の謎を解き明かす様々な理由を大きな視点で呈示してみたかった。食、死、有性生殖といったエネルギー横溢の骨の折れる迂回路を辿って、この呈示を試してみたかったのだ。¹

ここからは、バタイユが戦間期の経済危機に対応する必要から経済学の研究に取り組み始めたという動機が窺えて興味深い。実際、バタイユが経済学の学習を開始したのは 1930 年代初頭であり、論文「消費の概念」も 1933 年に雑誌掲載されていて、ケインズの『一般理論』より早い。バタイユもケインズと同様、そして、ほぼ同時に、当時の過剰生産的不況

¹ バタイユ (1949)、翻訳 18-19 ページ。

を背景にして、新たな経済学を模索し始めているのである。その後、ケインズの『一般理論』を手にしたバタイユは、自らは全般経済学と称することになる新しい経済像の提示を使命と考え始めたのだろう。その内面を引用から窺うことは実に容易である。

理論の構築はケインズら「経済学者たちの仕事」に任せたバタイユの著作は、ケインズが深く共鳴したマルサスの仕事へと急接近していくことになったのは必然であった。何より、バタイユの思想はマルサスとともに、マルサスによって提起された不生産的消費概念をその焦点として展開されていくことになったのである。

1. 不生産的消費概念の誕生と移転

マルサスによって提示された不生産的消費の概念は、彼の『経済学原理』第7章・第9節に現れる。この章は富の増進をどのようにして達成するかを書いているが、特にこの節では交換価値を増大させる不可欠の要因として「不生産的消費者 (unproductive consumers)」の存在があげられるのである。

急速な資本の蓄積、またはもっと適切に言えば不生産的労働の生産的労働への急速な転換のもとにおいては、物的生産物の供給と比較しての需要は、その時期のいたらないうちに衰えるであろうし、またなおそれ以上の蓄積への誘因は、それが土地の消耗によって妨げられる以前に妨げられるであろうことは、既に述べたところである。このことから次の結果となる、すなわち、生産階級が経験によって知られるよりもはるかに多くを消費するものと仮定することなしには、とくにかれらがかれらの資本に追加するために収入からすみやかな貯蓄をおこないつつあるときには、莫大な生産力をもつ国は不生産的消費者の一集団をもつことが絶対に必要であるということこれである。²

古典派において資本は賃金基金であるから、資本蓄積は不生産的労働の生産的労働への転換をもたらす。急速な供給増大に需要の変化が間に合わないために、利潤率が低下して地本蓄積の誘因が失われれば、経済発展は沈滞せざるを得ない。資本家階級の消費には対応する需要への追加を期待できないのだから、地主階級という「不生産的消費者」が一定量存在することは、経済発展の一大条件なのである。

生産的階級がかれらの生産するすべてのものを消費する能力を持っていることは、繰り返し認めてきた。そしてもしこの能力が適当に発揮されるならば、富の目的のために不生産的消費者は存在しえないであろう。しかし、能力はあるかもしれないが意志はないと

² マルサス (1820) 、翻訳下巻 326 ページ。

ということが経験によって認められている。しかも不生産的消費者が必要なのは、この意志を供給するためである。富を奨励するさいのかれらの特別の効用は、生産物と消費とのあいだに、国民的勤労の成果に最大の交換価値を与えるような均衡を維持するのにある。もし不生産的労働が優位にあるならば、市場にもたらされる比較的少量の物的生産物は、分量の不足から、生産物の価値を低く押さえて置くであろう。もし生産的階級が過剰であるならば、全生産物の価値は供給の過剰によって下落するであろう。最大の価値を生みだし、そして最大量の国の内外の労働を支配するものは、明らかに、両者のあいだの一定の比例である。そして、われわれは、全生産物の交換価値を維持しかつ増大する分配に必要な諸原因のなかに、ある一定の不生産的消費者の維持を数えなければならない、と結論してさしつかえないであろう。この一団は、富に対する刺激として分配を有効なものとするためには、また富にたいする障害として分配が不利益なものとなるのを妨げるためには、国がちがいきがちがうのにつれて、また生産力にしたがって、さまざまなものでなければならない。そしてもっとも好都合な結果は、生産的消費者と不生産的消費者との比例が、土壤の天然資源と人民の後天的嗜好および習慣ともっともよく適合していることに、明らかに依存している。³

引用の最初の部分は、明らかにリカードウの説を意識したものである。古典派は現在国内総生産と呼ばれているものを富と呼んだが、付加価値が生産されれば、それは同額の所得を生み出すから、可能性としては必ず供給と同額の需要が存在する。しかし、生産的階級である資本家にはその潜在的購買力を現実化させる意志を欠いているというのである。需要の不足は製品価格の低下をもたらすので、交換価値は本来のレベルを下回ることになる。生産的階級だけでは不足する需要を補うのが不生産的消費者の存在である。両者がある特定の比率になった場合のみ、自然価格を成立させる適度な有効需要が存在することになる。非生産的消費者である地主階級を維持するには、所得分配のなかで地代への配分が確保されなければならない。

こうして、経済発展の維持のために必要な要因としてマルサスによって取り出された特殊な概念は、ジャン・バティスト・セイによって「不生産的消費者 (consommateurs improductifs)」としてフランス語に翻訳された。セイはマルサスに 5 通の批判的な手紙を送っている。この 2 通目に「不生産的消費者」に関する批判的な内容が現れている。

あなたは生産を拒む怠惰さということが生産物の販売を直接に妨げると考えており、私もこの点に何の異存もありません。しかし、それなのに、なぜあなたは、「不生産的消費者」とあなたが呼ぶ人々の怠惰さについて、生産物の販売に好ましいものと見なすことができるのでしょうか。あなたは言います。「莫大な生産力をもつ国は不生産的消費者の

³ 同上、354-355 ページ。

一集団をもつことが絶対に必要である」と。生産を拒む怠惰さが前者では市場にとって有害であるのに、後者では好ましいということにどうすればなるというのでしょうか。⁴

生産中心の経済観と消費中心の経済観というものがあるとしたら、セイは明らかに前者の立場から後者を批判している。マルサスの経済観はその後者であるとするのだ。労働や資本蓄積をせず、ただただ消費をする階級はまさに怠惰さの権化である。怠惰は生産の敵であるから、そのような階級が経済発展に何らかの意味で貢献するなど考えられないとセイは述べているわけである。

あなたは政府の役人、軍人、公債を保有する金利生活者のことを仄めかしていますね。しかし、彼らが生産物への需要を増加させるのは非生産的な性格を持っていることに由来するわけではありません。私は彼らが受け取る俸給の正当性を論駁することなど考えていません。かと言って、納税者が、彼らの税金の受取り手が、自分たちの欲求を大いに満足させるとか、まさにそのお金を再生産的な方法で活用しているとかいう意味では、大して自分たちの助けになっていないとしても、公務員たちの俸給についてそれほど当惑するとも思わないのです。いずれにしても、お金は支出されるでしょうし、それはあなたが「不生産的消費者」と呼ぶ人々がまさに購入するのと同額の製品の販売を増進することになるでしょう。正直申し上げて、販売が増進されるのは「不生産的消費者」を通してではなく、彼らの支出手段を提供してくれる人々が生産をしていることによってなのです。たとえ、不生産的消費者がすべて消滅したとしても、もっとも神が許さないでしょうね、販売は1ペニーたりとも減らないのです。⁵

人々が消費支出を行う元になる所得が付加価値の分配分にすぎないことを言うために、セイは、マルサスの「不生産的消費者」からいったん離れて公務員や国債保有者の話をする。彼らの持つ購買力は、言うまでもなく、付加価値を生産する生産的階級の所得が再分配されたものである。そもそもの付加価値は生産活動によって増加するのであって、消費や需要がそれを大きくするわけではない。セイの論旨はこのようなものであろう。いずれにせよ、マルサスの生み出した不生産的消費の概念は、セイによってフランスへと導入されたのである。たとえ、それが批判的なものであったとしても。

2. 最適消費性向と不生産的消費

⁴ セイ (1821)、32 ページ。

⁵ 同上、33 ページ。

マルサスは経済発展における不生産的消費の不可欠性を、『経済学原理』の序説で既に述べている。しかも、それはあたかもリカードやセイの批判を予期するように、アダム・スミスの所説を引き合いに出した説明であった。少々長くなるが引用してみよう。

一例をもってわたしのいわんとするところを明らかにしよう。アダム・スミスは、資本は節約によって増加し、すべてのつつましい人は社会の恩人である、また富の増加は消費を越える生産物の差額にかかっている、と述べている。これらの命題が大いに正しいことは、全く疑いの余地がない。年々ある収入を資本に転化し、そして消費を越える生産物の差額をつくりだす程度の節約がなければ、かなり大きくかつ継続的な富の増加はとうていおこりえないであろう。しかしそれは無制限に正しいのではなく、貯蓄の原理は、過度にわたるときには、生産への誘因を破壊し去るであろうことは、まったく明らかである。もしすべての人がもっとも簡単な食物、もっとも貧弱な衣服、およびもっともみすぼらしい家屋で満足しているとするならば、そのほかの種類の食物、衣服および住居が存在しなかったであろう、ということはたしかである。そして土地の所有者にとってはよく耕そうとする適当な誘因がないのであるから、たんに便宜品や奢侈品からえられる富がまったくなくなってしまうだけでなく、さらに、同じ土地分割がひきつづきおこなわれるならば、食物の生産は尚早のうちに妨げられ、人口は土壌がよく耕されるずっと以前に停滞してしまうであろう。もし消費が生産を越えるならば、その国の資本は減少するにちがいないし、またその富は次第にその生産力の不足のために破壊されるにちがいない。もし生産が消費を遥かに越えるならば、消費の意志の不足のために、蓄積や生産の誘因は消え去ってしまうにちがいない。この両極端は明らかである。そこで経済学の力ではそれをたしかめることができないかも知れないが、生産力と消費への意志との両方を考慮に入れた場合に、富の増加への刺激が最大になるある中間点がなければならぬ、という結論となる。⁶

アダム・スミスの立論に対して、何らかのかたちで需要の先行性を言うために、マルサスは需要が先行していなければ、新しい財貨の生産は起きないではないか、というような論旨を展開している。それはそうとして、ここで提起されているのは、国民所得は消費と貯蓄に分かれるのだから、片方が増えればもう片方が減るのであり、ここに何らかの最適なバランスを見出す必要があるということである。「生産力」と「消費への意志」という箇所を見ると、マルサスがダイナミックな経済を考え、保証成長率と現実成長率のズレを言っているように見えるし、また、漠然とそのようなイメージもあったであろう。しかし、富、すなわち、国内総生産の最大化を目標に立てていることから、マルサスの立論が究極的に今期の均衡国民所得の枠を超えていないことははっきりしている。この点を踏まえて、どう引用箇所を

⁶ マルサス前掲書、翻訳下巻 26-27 ページ。

元に、マルサスは最適消費性を求めようとしていたと喝破したのはオスカー・ランゲであった⁷。

ランゲは投資関数、および、流動性選好関数を次のように想定する。ただし、 I は投資、 i は利子率、 C は消費、 M は貨幣供給、 Y は国民所得である。

$$I = F(i, C) \quad (1)$$

$$M = L(i, Y) \quad (2)$$

投資を固定した場合、利子率と消費の関係は、式 (1) から次のように表される。

$$dI = F_i di + F_C dC = 0 \quad (3)$$

また、国民所得の定義式から次の式が従う。

$$dY = dC + dI \quad (4)$$

式 (3) の条件を式 (4) に代入すると次の関係が成り立つことがわかる。

$$dY = dC \quad (5)$$

さて、貨幣供給が一定であるとする、式 (2) からは次の式が得られる。

$$dM = L_i di + L_Y dY = 0 \quad (6)$$

式 (3) と式 (6) から次の二つの式が得られる。後者の変形には式 (5) を用いた。

$$di = -\frac{F_C}{F_i} dC \quad (7)$$

$$di = -\frac{L_Y}{L_i} dC \quad (8)$$

式 (7) と式 (8) を結べば、最適消費性に繋がる次の条件式が導かれる。

$$-\frac{L_Y}{L_i} = -\frac{F_C}{F_i} \quad (9)$$

条件式 (9) が意味するところを明らかにするために、消費・利子率平面上に等投資曲線群を、国民所得・利子率平面上に等流動性曲線を描いてみよう。まず前者であるが、投資が消費の増加関数であることから、投資額を一定に保つためには利子率が上昇しなければならず、等投資曲線は右上がりになることがわかる。また、消費の伸びに対する投資の伸びの反応は逡減すると考えられるので、曲線は下方に凹であろう。こうして、等投資曲線群の形状は図 1 のようになる。

続いて、等流動性曲線は図 2 のようであろう。貨幣需要を一定に保つためには、国民所得が増加した場合に利子率が上昇しなければならない。このため、曲線は右上がりになる。また、国民所得が大きくなっていくと貨幣需要の増大は加速していくので、利子率の上昇率も高まらなければならない。このため、曲線は下方に凸になる。

さて、式 (9) 意味するところであるが、右辺は等投資曲線の傾き、左辺は等流動性曲線の傾きである。そこで、式 (9) は均衡投資と均衡国民所得が二つの曲線の接点で決まるこ

⁷ ハーバラー (1944)、翻訳上巻 228 ページ。

とを表現している。等投資曲線と等流動性曲線を重ね合わせて描くと図3になる。線分 OA は均衡国民所得、線分 O'A は均衡消費であるから、線分 OO'が均衡投資である。

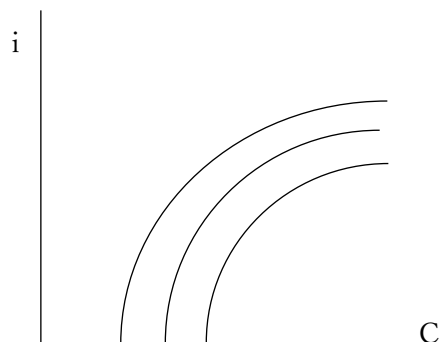


図 1

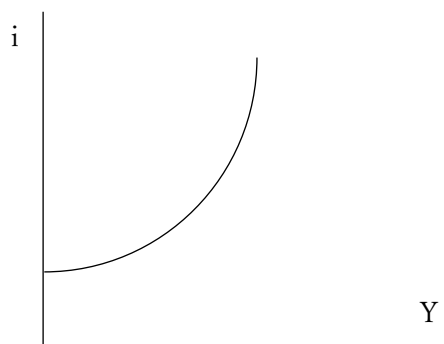


図 2

どのような大きさの投資を選択するかによって均衡国民所得は異なる。最適消費性向を考えているのだから、ケインズ、そして、ランゲ的な文脈では、選ばれる均衡国民所得は完全雇用水準のそれであろう。しかし、マルサスを考えた場合、完全雇用ということは目標に入っていない。マルサスら古典派は失業の存在を明示的に考えていないからである。彼らにとって雇用量の問題は不生産的労働と生産的労働の比率の問題なのである。マルサスにおいては、需要が有効需要を下回る場合、製品の市場価格が自然価格を下回る。自然価格が適切な利潤水準を保証するものである以上、それを下回る製品価格は利潤の低下をもたらし、資本蓄積への意欲が減退することで順調な経済発展を阻害する。つまり、マルサ斯的文脈で選ばれるべき均衡国民所得は、全製品が自然価格と同じ交換価値を持つようなそれである。

こうして、等投資曲線と等流動性曲線の交点が決まると、横軸を読むことで最適国民所得

での国民所得と消費の組合せを得ることができる。国民所得・消費平面上にこの組合せをプロットすると図 4 になる。最適消費性向は原点とこの点を結ぶ直線の傾きである。国民の消費性向は生産的階級のそれと不生産的消費者階級のそれとの平均である。両階級の所得水準が大差なければ、結局人口比によって国民の消費性向が決まる。マルサスはこのことを述べていたのだと考えられる。

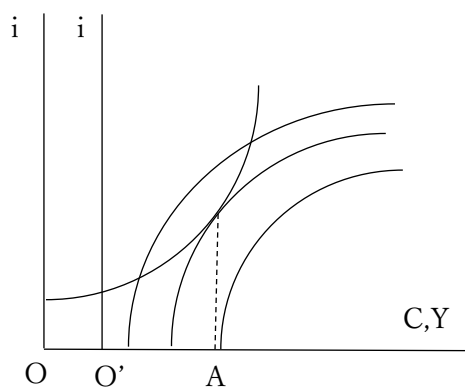


図 3

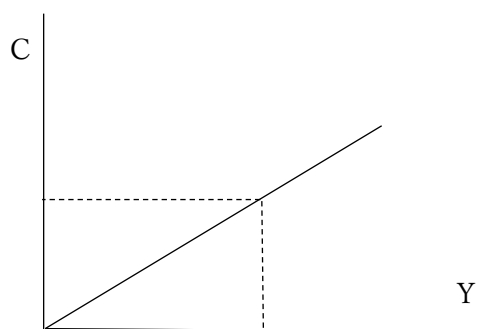


図 4

3. 奢侈と不生産的消費

ジョルジュ・バタイユはフランスの文学者であり、比較的若いころ偽名で書かれたエロティックで暴力的な小説、『眼球譚』や『マダム・エドワルダ』で有名である。しかし、バタイユは 1930 年代初めから経済学に関心を寄せるようになり、それに関する論文や著作を発表するようになった。その探究を代表する著作が、1949 年に出版された『呪われた部分 全

般経済学試論『蕩尽』であった。その前書きでバタイユは、同書を指して第1試論と呼んでいることから、彼の言う全般経済学に関するシリーズが構想されていたことは間違いない。実際、バタイユの著作『内的経験』の1954年の再販本には、『呪われた部分』シリーズの構成が、既刊の第1巻『蕩尽』、第2巻『エロティシズム』、第3巻『至高性』からなることが明記されている。

第2巻の草稿は1950年から翌年にかけて書かれたものが残されていて、バタイユの没後に編集され出版されているが、バタイユ自身はこれとは別に1957年に『エロティシズム』という書物を出版している。そして、刊行直後にマルグリッド・デュラスと行った対談で、これは『呪われた部分』第2巻なのか、という問いに、そうです、と答えている。第3巻『至高性』については、バタイユは1953年春から翌年夏にかけて草稿を準備したが結局完成には至らず、したがって、現在まで単行本としては出版されていない。

本稿の目的はもちろん「不生産的消費」が、マルサスからバタイユにどのように受け継がれ、概念的に発展させられていったかを明らかにすることにある。幸いその点に関して、既に第1巻『蕩尽』に「不生産的消費」概念が出尽くしているのだから、同書とその元になった1933年の論文を取り上げて詳細に検討したい。

『呪われた部分』において、バタイユは全般経済学の構想を開陳する。しかし、彼はその構想がいかなる前提から生まれたかを明らかにしはしない。しかし、古典派経済学におけるリカードウ＝マルサス論争を知る者にとっては、相互の関連性に思い至ることは決して難しいことではないだろう。

私は、もうこれ以上読者を待たせずに、せめて次のことだけは明確にさせておきたい。すなわち成長の拡大それ自体が、経済原則の転倒を一さらには経済原則を支える倫理の転倒をも一要請しているということである。限定的な経済の展望から全般的な経済の展望へ移るということは、まさしくコペルニクス的転回を、つまり思考—そして倫理—の逆転を、実現するということなのだ。最初から、もし富の一部、それも大量と見なされる部分が、消滅へ差し向けられるのならば、もしくは、利益の可能性のないまま非生産的な使用に差し向けられるのならば、商品を代価なしに譲渡するというのも妥当なことに、いや不可避なことにさえなってくる。そうすると、ピラミッドの建設のような純然たる浪費はもちろんのこと、成長を追求する可能性も、贈与に従属するということになっていく。世界全体で産業を発展させるためには、アメリカ人が、彼らの経済に対して、利益なしの操作の余地を持たねばならないと明確に理解することが必要なのだ。世界規模の巨大な産業ネットワークは、タイヤを取りかえるようなぐあいには、運営されえない……。このネットワークは、宇宙のエネルギーの流動に依存し、これを限定することができず、その法則を無視することもできない。無視したらたいへんな結果が待っているのだ。こうした意味でこのネットワークは宇宙のエネルギーの流動を表現していると言える。自分を超える動きを、まるでタイヤを取りかえる整備工の狭い精神で徹底的に秩序付けようとす

る者に不幸あれ！⁸

バタイユは従来の経済学の発想を限定経済学として定義している。それは人間によって有用性の価値観で整序され計算された、狭い意味での経済現象を扱っているにすぎないからだ。利益の追求や効率性の徹底という話は、この限定経済学でしか問題にならない。だが、視点を遙かに広くとった場合、人間の経済は宇宙や大自然のなかでその一部として行われていることは否定できない。そして、この全自然のなかでのエネルギーの流動という観点から経済を捉えた場合、その性質は節約ではなく過剰ということに徹底して彩られている。人間の経済はこの暴力的なまでに過剰なエネルギーを浪費することによって、初めて秩序を保つことが可能である。過剰さを浪費する必要は、狭く人間の経済を考えた場合でも無視できるものではない。徹底した効率性の追求は、時に経済活動を委縮させて却って経済成長の妨げになる場合がある。利益追求の原則を無視したような、浪費や無償の贈与がむしろ経済成長の前提になるという局面も珍しくはないのである。バタイユの全般経済学はこのような視点を有している。

バタイユの、あまりに宇宙論的で宗教的な色彩すら帯びた全般経済学をどのように受け止めるべきであろうか。その概念の持つ意味を経済学の枠内で理解するには、『呪われた部分』は適当なテキストではない。考察の場を論文「消費の概念」へと移すことにしよう。

人間の活動は、生産と保存の過程に全面的に帰せられるわけではないし、出費 (consommation) というのも異なる二つの分野に分けられるべきなのである。第一の分野、つまり生産と保存の過程に帰せられる出費は、一定の社会の個人が生命の保存および生産活動の存続のために必要最小限のものを使用するということなのである。要するに、この出費は生産活動の根本的な条件になっているということなのだ。第二の分野は、非生産的と呼ばれる消費 (dépense) である。これは、例えば、奢侈、葬式、戦争、礼拝、荘厳なモニュメントの建設、賭け事、芸術、倒錯的な性活動 (つまり生殖の目的からはずれた活動) のことなのだが、これらの活動はどれも、それ自体のなかに目的をもっているのである。少なくとも、もともとの状況ではそうだった。ところでいま必要なのは、消費という名詞を、これらの非生産的な活動形態に差し向けることである。生産活動に媒介項として役立っているすべての様式の出費を排して、そうすることが必要なのである。もちろん、今列挙した様々な非生産的な形態を相互に対立させることは可能だが、これらの形態は、次のような共通の特徴を持つ総体を形成しているのだ。すなわち、これらの形態のどの活動も損失に強調が置かれていて、しかもそれぞれの活動が真の意義を持つためにはできるかぎりその損失が多大にならねばならないという特徴である。⁹

⁸ バタイユ前掲書、翻訳 37-38 ページ。

⁹ バタイユ (1933)、翻訳 310-311 ページ。

バタイユは、マルサスの生産的消費を「出費 (consommation)」、不生産的消費を「消費 (dépense)」と呼んでいるのである。「消費」は何らの有用性という目的を別に持たないという意味でそれ自体を目的としている。「消費」は純粋な意味での浪費であって「蕩尽 (consummation)」と呼び変えて構わないものである。有用性の観点から見れば、それらは損失以外の何ものでもない。だが、一見有用性や効率を基盤にして成り立っている人間の経済は、バタイユによれば、この「消費」、すなわち、不生産的消費を不可欠の前提としているのである。

バタイユが「消費」の一例として、筆頭に「奢侈 (luxe)」をあげていることに注目しよう。フランスで奢侈と言え、奢侈論争である。1714年にマンデヴィルが『蜂の寓話』を出版することがきっかけとなり、奢侈が果たして文明の原動力なのかどうかを巡って、フランスでは奢侈論争が展開された。ジャン・フランソワ・ムロンは1834年に『商業についての政治的試論』を出版し、マンデヴィルの議論の経済的側面を強調して奢侈を擁護しようとした。ムロンによれば、経済発展を導いていく動力は奢侈への欲求である。社会がどのように奢侈を抑制しようとしても、以前の奢侈を忘れるような新たな奢侈への欲求が生まれるのが人間の性である。そして、こうした無限の奢侈への欲求こそが人間社会の洗練の度合いを高めていくことは否定しがたいと、ムロンは述べる。このようにして、ムロンは、奢侈は悪徳であると述べて、露悪的な逆説を展開したマンデヴィルとは異なり、ストレートな奢侈肯定論を提示したのである¹⁰。奢侈こそが近代経済を発展させたという総括は、ヴェルナー・ゾンバルトの1912年の著作『恋愛と贅沢と資本主義』によって明瞭な形態を得た¹¹。

それにしてもムロンは、国家の役割として富者の奢侈を経済発展へと結びつけることを強調していた。つまり、ムロンにとって、奢侈は一つの手段である。これに対して、不生産的消費の根源性を信じるバタイユにとって、「消費」はいかなるものための手段でもないという意味でそれ自体が目的である。通常の経済学が前提し強調する生産と有用性は、経済の目的である不生産的消費のための手段に他ならない。人間の社会が格差や階級を前提とするものであることにも意味がある。なぜなら、経済には不生産的消費者の階級である富裕層が、浪費を遂行するために必要だからである。

消費の在り方と社会的役割を以上で指摘してきたわけだが、そうすると今後はこの消費の役割と、これに対立する生産および獲得の役割との関係を考察しなければならなくなる。この関係は、目的と有用性の関係としてすぐさま提示される。生産と獲得は、発展しながら形態を変えていくのであって、一つの変数を形成している。この変数を知ることが歴史の過程を理解するうえで根本の条件になっている。しかしそうはいっても生産と

¹⁰ 米田昇平の諸著作を参照されたい。

¹¹ マックス・ヴェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」が世俗内禁欲を強調するのと、鋭い対照をなしている。

獲得は、消費に従属した手段でしかないのだ。人間の貧困は、どんなひどいものであっても、社会を動かして保存への欲求に勝るように仕向けたことはかつて一度もなかった。非生産的消費の優越を維持するために、無益に消費する階級によって権力が行使され、貧困層は社会の活動のいっさいから排除されてしまった。したがって貧者は、権力の圏内へ戻る手段としては、権力を占有する階級への革命的な破壊、つまり際限のない、流血の社会的消費しか持たないのである。

バタイユは、フランス革命の歴史やロシア革命の現実を念頭に階級社会が革命を必然化することを述べている。しかし、革命自体が政治的な祝祭であって、巨大な不生産的消費でもあるのである。ところで、バタイユには独自の革命観がある。それは、『呪われた部分』第3巻『至高性』のための草稿のなかに現れる。バタイユはブルジョア革命と社会主義革命の違いを認めない。フランス革命がそうであるように、ロシア革命もまた封建社会に対する革命であるとするのである。

バタイユは封建社会を、富を非生産的なかたちで使用することが優先される社会として定義する。これに対して行われた被抑圧階級による革命は、社会の原則を消費の優位から生産や蓄積の優位へと転換させる結果をもたらした。この点で社会主義思想も何の変わりもない。生産手段の所有が個人的か集団的か、ブルジョアによる支配か労働者たちによる支配かは、バタイユの観点からは大して問題ではないのである。

不生産的消費が不可欠であるというバタイユの観点からすれば、不生産的消費者階級を特権階級として否定する革命後の社会は大いに問題を孕んでいる。この点、階級の徹底した否定というかたちで、ブルジョアの奢侈をも否定し去ろうとする社会主義社会の方がよりたちが悪い。マルサスの不生産的消費者は封建遺制としての地主階級のことであるが、ここでもバタイユの思想はマルサスと共鳴し合うことになる。

おわりに

マンデヴィルの『蜂の寓話』がムロンらに影響してフランスに奢侈論争を巻き起こしたことは本稿でも述べた。一方、アダム・スミスがマンデヴィルから強い影響を受けるとともに、マンデヴィルの「私悪 (private vices)」を「私益 (private interest)」として読み替えて、露悪的なニュアンスを無色化することで自らの道徳哲学を構築していったこともまた有名な事実であろう。リカードウがアダム・スミスの理論的側面を受け継いだのに対して、マルサスはその他の思想的な内実を受け継いだのだとすれば、マルサスの思想のなかにマンデヴィル的な奢侈を肯定する要素が色濃く存在することはむしろ当然だろう。

かくして、マルサスの政治経済学は過少消費による不況的状况を阻止するために不生産的消費を強調する方向をとることになった。マルサスの不生産的消費概念は、セイの批判の

ための翻訳や著作を通じてフランスへと導入される。そして、フランスにおいてムロン以来の奢侈肯定論と合流しながらフランス経済思想の伏流となったのだと推測される。これが、再び現代的なかたちで芽吹くためには、1930年代の世界不況が必要であった。明らかな有効需要不足が生み出した不況的状况のなかで、文学者バタイユがケインズと呼応するかたちで再び不生産的消費の重要性を強調することになった。

ざっと、以上が本稿の学説通史的なまとめということにはなるだろう。さて、不生産的消費概念の21世紀における意義は何であろうか。世界的な超低成長経済が支配的な現在、再び不生産的消費は強調され、称揚されるべきなのだろうか。トマ・ピケティの啓蒙書にあるように今世紀に入ってから所得格差は拡大している。富裕層の不生産的消費が世界経済を救うことに望みを託すべきだろうか。しかし、不生産的消費は純粋な浪費である。資源エネルギー問題の解決が急務というなかで浪費の推奨はありうるのか。このような問いのなかに、八方塞がりの人間の経済の終わりが見え隠れするなら、それこそまさにバタイユが幻視していた未来であるだろう。

【参考文献】

- Bataille, G., 'La notion de dépense,' *Critique sociale* 7, 1933. (バタイユ『呪われた部分—全般経済学試論・蕩尽』酒井健訳、ちくま学芸文庫、2018年、所収。)
- Bataille, G., *La Part maudite: Essai sur l'économie générale—La Consummation*, Les Éditions de Minuit, 1949. (バタイユ『呪われた部分—全般経済学試論・蕩尽』酒井健訳、ちくま学芸文庫、2018年。)
- Haberler (ed.), G., *Readings in Business Cycle Theory*, Blakiston, 1944. (ハーバラー篇『景気変動の理論』上下巻、後藤譽之助訳、實業之日本社、1951年。)
- Malthus, T. R., *Principles of Political Economy*, John Murray, London, 1820. (マルサス『経済学原理』上下巻、小林時三郎訳、岩波文庫、1968年。)
- Say, J. B. (translated by John Richter), *Letters to Mr. Malthus*, Sherwood, Neely & Jones, London, 1821.